



TRACK 6

Eskimo

I look to my Eskimo friend...
I look to my Eskimo friend...
When I'm down, down, down...

Track.6 Eskimo

「あー……寒い、寒い」

思わず零してしまった言葉は、白い息となって眼前に現れる。

冬―真冬の季節だ。

俺は寒いのが苦手だ。寒いよりは暑い方がマシだと思っている。そもそも寒い方が好きな人間なんて、この国にはあまりいないのだろうとさえ思っているほどだ。

手持ちの厚手の服は少なく、重ね着をしてその上にコートを着る。これが俺の冬のファッションスタイルである。見た目もそこまで悪くないはずだ。これでも多少は服に気を使っている方である。世間の目はもちろん、リニアや葵にからかわれない程度には。

『鈴木も年相応の格好にしたらどうだ？』

ふと、頭に葵の声が響く。昨年 of 苦い思い出だ。あれ以来、俺はファッションに関心を持た

ざるを得なくなつたわけだが……。

先日の事件から一ヶ月が過ぎ、大学の方も冬休みに入った。俺の生活も随分『普通』というものに戻っており、アルバイトも再開し、時間が空くと今日のように図書館で勉強をする日々。

「これが日常か、あるいはあれが日常か」

以前に比べるとあのような非常識な事態に巻き込まれている頻度は少ない方だ。

それでもやはり、

「おつ、鈴木じゃないか！」

突然、背後からの呼び掛けに俺の意識は現実へと引き戻される。

「先輩……!!」

「元気だったか？」

「あ、はい。まあまあ元気にやっています」

「随分久しぶりだな」

そう言つて笑う彼は俺の大学の先輩だ。ゼミや講義でよく一緒になり仲良くなった、自分で言うのも何だが、大学内の数少ない知り合いだ。

「あれか、図書館からの帰りか？」

「はい。そう言えば先輩、試験の結果どうでした？」

「お前……会つて早々その話題か」

見るからに彼の表情は暗くなつていく。それを見た俺は一瞬で察してしまった。

「ま、まあ復学したばかりなんですから、ちよつとずつ頑張ってください」

「そうだな、俺もそろそろちゃんとするか」

「そろそろじゃ遅いと思うのですが」

「うっせー、先輩に向かつてなんだその口の聞き方は——って、そういうえばお前は試験どうだ

「ったんだよ」

先輩は俺の肩に手をかけたまま、思い出したかのように問いかけた。

「何単位とれた？」

「俺ですか？まあ目標にしていた分は取れましたけど」

「このくらいか？」

そうやって先輩はハンドサインを示す。おそらく十単位で示しているのだろう。俺は小さく首を振って、先輩以上の数を示した。

「何だ、お前!!普通に単位取れてるじゃんか!勉強したのか!？」

「当たり前じゃないですか」

思わず後ろに身を引いた彼を、ため息と共に俺は振り返る。そして、たった今自分が出てきた場所と先輩を見比べた。

「そういえば先輩も図書館に来ていたんですか?意外ですね」

「ん？ああ、まあ資格の勉強に。取っというて損はないと思って」

「実務系ですか？」

「語学はいらないからな」

「さすが……留学した人は違いますね」

「俺もあの時は必死だったけどな、今はこの有様だが」

先輩は軽く肩をすくめてため息をつく。しかし、その演技がかった困り顔からして、そこまですべて深刻に悩んではいなさそうだ。

「あ、先輩。それじゃあ俺はそろそろ帰るんで」

「まだ夕方じゃないか、早いな」

「あー……実は」

ここで先輩に嘘をついても仕方ない、俺は事実だけを述べた。

「実は居候が増えまして」

「居候？鈴木、お前一人暮らしたよな？」

「そうなんですけど」

この複雑に絡まり合った事情を一体どうやって一般人の先輩に伝えればよいのだろうか。俺が歯切れの悪い解答をしたせいか、先輩はいよいよ怪しげな視線を向けてきた。

「あれか、女か」

「え」

「お前が同棲をするとはな。見かけによらず案外やるもんだ」

先輩は一人うんうんと頷き、恨めしげに俺の首を締めあげた。

「いや、そうじゃなくて!!先輩、話を最後まで聞いてください……!!」

「何だよ、違うのか？」

「違いますよ!!」

しかし、どう説明すればよいのか。

先輩の腕を逃れた俺は、再び弁明の言葉を考えるが上手くいかない。

「いいよ、いいよ。これ以上は問い詰めないさ、まあ仲良くするんだな」

それでもやはり先輩のニヤついた顔は収まらない。俺も適当な愛想笑いを浮かべ、早々にここを離脱しようと思ったが、

「それで？彼女はどんな感じなんだ？」

「だから違いますって……俺がそんな、同棲なんてできそうな男に見えますか？」

「わかったよ、俺が勝手に思っとくだけにしとく。まあ、でも俺からの助言だが、意外とお前はそういう彼氏彼女みたいなのが必要だと思うぞ。色々と支えてもらえ」

「は、はあ」

年上からのありがたい助言のつもりらしい。先輩は笑いながら俺の背を叩くが、俺にはさっぱりだった。

「さてと、そろそろ俺は行きますね」

「あ、待て待て」

そういうと先輩は近くの自動販売機でコーヒーを二本買ってきた。

「コーヒー一杯ぐらいの時間はあるだろう？」

「いや、でも」

「俺の初奢りだ」

仕方なく受け取り、俺はコーヒーを口に含む。それは勉強で疲れた体にはとてもよく染みわたり、俺は思わず近くのベンチに腰をおろしてしまった。

「先輩は来年卒業ですか？」

「あー、そうだね。最近不景気だし就職できつかなー」

先輩は笑いながら語っているが、本当の所はどのようなだろう。俺には全く先輩の考えはわからなかった。不景気―その言葉は俺にも重くのしかかり、返す言葉が見つからない。

「ま、大丈夫だろ。俺、英語はできるし」

「確かにそれだけでも強みになりますからね」

俺は再びコーヒーを口に含む。そして、口から白い息を吐き出した。

「何も変わっていませんね」

俺は大学の風景を見ながら、ぽつりと呟いた。

「……そうだな」

数秒遅れて先輩もうなずく。

「今の俺の言葉の意味、わかったんですか？」

「なんとなく、な。けど俺もお前もまだまだ若いんだから、そんな爺臭いこと言うな」

「先輩、先輩。先輩はもうアラサーになります」

「うるせえ。それでも社会的にはまだまだ好青年で通る。だからそんな心配することないんじゃないか？ただただ現実だけを見て生きて行こうぜ」

「……俺はいつだって現実を見てます」

「そうか、なら結構、結構。とにかくお前よりも下の条件下の人間はいる。そう思って生き

て行けばいい」

「……やつぱり先輩はすごいですね」

「だろ？」

先輩は得意げに笑うと、ポケットから煙草を取り出した。そして俺に軽く了解を求めると、先輩は気持ち良さそうに煙を吹かし始める。

「お前は？」

「いえ、あまり好きじゃないんで」

「まあ確かに吸ってるイメージないもんな。どうせなら一生吸うんじゃないぞ」

「言われなくてもそのつもりです」

「なつまいきー」

「そりやどうも」

「そういえば、お前の友達の彼……葵ってやつは？最近会ってるのか？」

「葵ですか？まあ、会って話したりはしますけど。あいつが日々何をしているのかは全く知りません」

「去年はちよくちよく見かけたんだけどな、学校は大丈夫なのか？」

「本人に聞いてください」

まあ、あまりいい返事は聞けませんでしょうが。先輩は大丈夫か？などと軽く笑いながら、煙草を吸い続ける。

しばらく会話もなく、俺と先輩はぼんやりと街ゆく人々を見ていた。沈黙が心地よい、こういう相手は非常に気が楽だ。

「そうだ」

煙草を一本吸い終えた所で、先輩が思い出したかのように口を開いた。

「鈴木、お前今日暇だったら酒でも飲みに行かないか？奢るぞ」

「すみません、しばらく十時位までは空いてないです」

「バイトか？」

「いや、バイトは週末なんですけど。さっき言った夕飯の支度がですね」

「じゃあ十時ならいいだろ、お前の家の近くで」

「それなら大丈夫です！前に行った事ある店でいいですか？」

「ああ、着いたら連絡してくれ」

「はい。ごちそうになりますね!!」

俺は尊敬の眼差しで先輩を見据えた。先輩はそんな俺の視線を避けるように、財布とにらめっこする。

「あ、ということは俺と先輩でサシ飲みですか？」

「誰か連れて来たい奴でもいるならいいけど」

「ああ、いえ。先輩、サークルとかに知り合い結構いるんで」

「みんな忙しいんだと……とにかく十時に待ち合わせな」

「はい、それじゃあ」

そうやって俺は、コーヒを一気に飲み干すとベンチから立ち上がる。

「行くのか？」

「はい、そろそろ」

軽く手を振る先輩に頭を下げ、俺は大学の出口を目指した。

しかし次の瞬間――

「な、なんで」

「鈴木？」

目の前から顔なじみの女が、俺に向かって大きく手を振ってきた。思わず固まる俺に、先輩も訝しげな視線を向ける。

「どうした？」

目の前にやってきた相手は俺たちの視線を気にすることなく、いつもの調子で話しかけてきた。

「聡太!!」

「……お前、何でここにいるんだ」

曇り空でも銀色に煌めく銀髪。深く透き通った青い瞳。リニアだ。

いや、リニアが何故、俺の学校にいる。

「いつもならご飯作ってる頃なのに、遅かったんだもん。迎えに来ちゃった」

突然の出来事に俺は開いた口が塞がらなかったが、すぐにはっとなつて後ろを振り返った。

「が、外国人……」

「エー」

先輩は俺以上の衝撃を受けたのか、じつとリニアの顔を見つめていた。リニアもリニアで、先輩が俺の知り合いだと分かれると、親しげに手を振って挨拶をする。

「あれが……彼女が、その、居候か？お前が将来を約束したという……」

「んなこと一言も言っていないでしょうが!!」

勢いよく否定する俺の横を通り過ぎ、リニアは先輩に向かって丁寧にお辞儀をした。

「こんにちは、いつも聡太がお世話になっています。リニア・イベリンです」

先輩は面食らった様子で、されるがままに彼女と握手を交わす。

「あ……えつと、俺の後輩とは一体どういう御関係で……」

するとリニアは何でもない風に、

「私の好きな人です。ええと、つまり……何て言えばいいんだろ」

「おい!!お前!!違う!!えつと、その……その日本語は違うよ!？」

「オウ!!ワタシ、ニホンゴ、ヨクワカラナイヨー」

全くこいつは……。

大きなため息と共に俺は先輩へと振り返る。先輩は俺たちのコントのような会話を呆然とした様子で眺めていた。

「そうか、外国人……頑張れよ」

先ほどの言葉はいずこへ、先輩は思いっきり現実から目を反らして図書館へと踵を返す。

「先輩!!ちよつ、違いますからね!!」

我ながら見苦しいが、俺は必死に否定の言葉を先輩の背中に投げかける。しかし、先輩は俺の声を全く聞かずに片手を振って別れを告げた。

「十時にな」

「わかってますよ!!」

「十時?何それ!!」

とぼとぼと重たい足取りで去っていく先輩を見送り、俺も幼稚園を目指す。

「ねえ、聡太。十時にどこか行くの?夕飯は?」

嬉々として訊ねるリニアを余所に、俺は今の会話でだいぶ精神的に疲れていた。

「お前なー、誤解を招くような言い方をするな」

「誤解？何が？」

「その……お前が、俺の事を……」

その続きを自分で言うのは妙に恥ずかしい。ちらりとリニアを見ると、やつと彼女は俺が言わんとする事を察した。

「あ、あれ？誤解も何も事実だもん。私、聡太が好きだよ」

「え」

「先生も好きだし、奏も好き。みんな大好きだもん」

一瞬びくりとしてしまった俺を殴りたい。彼女はそんな俺の様子を不思議そうに笑っていた。何を期待していたわけでもないが、俺は更に体力を削られた様な心地だった。

「……帰るか」

「うん、ご飯！ご飯!!お腹空いたよ」

「そーいや、何でわざわざ迎えにまで来たんだ？」

「あー……うん」

俺の問いかけに、ふと、リニアはきまりが悪そうに俺から視線を反らした。

「朝もしてくれたのに……さすがにこう毎回、子供にやってもらうのは良心が……ね？」

「料理しろ。お前がすれば全て解決する」

「私、料理できないもん」

「一品くらいは何かできるだろ」

「え、私インスタントラーメンは勝手にできあがると思ってるけど」

「んなわけねえだろ、どこの世界の食いもんだ」

リニアと二人で歩く帰り道は平和そのもので、ああ、俺は普通の日常を過ごせているんだと

思ってしまう。普通の日常―、日々に違いはあれども、きつと後から振り返ってみたら何てことない一日として捉えられるのだろう。今日も同じだ。先輩と久しぶりに会った。リニアが迎えに来た。

―けれど昨日と今日は違う。

そんな当たり前のことを思いながら、俺はふつと笑みを零してしまう。

―今日も『今日という日』のために時間が流れている。

ほんの少しだけ『今日という日』に何かが起こりそうで、俺はつい期待してしまっているのかもしれない。

「ほら!! 聡太!! 遅いよー」

「待てつて。一緒に帰るんじゃないのか」

「はやくー」

数メートル先で手を振るリニアに、俺はしぶしぶ足を速める。先ほどと何も変わらないはず

なのに、真冬の寒さはどこかに行ってしまったような気がした。

「それで？結局十時に何があるの？」

幼稚園に着いても、リニアは未だに同じ質問を繰り返していた。好奇心故というやつだろうか。

「聡太ー」

別に隠す様なことでもないのだが、あえて言うならば恥ずかしいのかもしれない。

今夜、先輩とのサシ飲みと分かった時点で俺はいくつか進路相談をするつもりでいた。今後どのような勉強をすればいいのか、いつ頃から準備を進めて行けばいいかなど、来年に向けての参考話を聞こうと思っていたのだ。

しかし、そこにリニアが来るとなると話は変わる。

元々、交友関係の広い先輩だ。リニアと性格が似てるといっても過言ではないだろう。となると、俺の真面目話が端に寄せられてしまう可能性がある。何より、普段から滅多に奢ることのない先輩に誘われたということは、何かしら大切な話があるのかもしれない。そんな場面にはリニアを連れて行く気にはどうしてもなれなかった。

「ねえ!!十時に何があるのー?」

「うるさい。頼むからついてくるな。それと離れる。洗い物しづらいだろ」

「えー……教えてよ」

リニアは離れない。先ほどからずっと俺の肩に顔を乗せ、同じ質問を繰り返していた。

「いい加減にしろ。俺にも秘密の一つや二つあるんだよ」

「……」

するとリニアは、すつと俺の肩から退いた。やつと重いものが肩から離れてくれたと思った矢先――

「私たちの間に秘密なんて無いでしょ?」

「っ!!」

突然耳元で囁かれた声に、俺は思わずスポンジを落としてしまった。

「おまつ……何するんだよ!!」

「ひどーい、命がけで私のこと守ってくれたのに……ああ、あの時の情熱はどこにいつてしまったのかしら……」

「しらん!!」

俺はシンクに落としたスポンジを拾い上げ、再び洗い物をはじめめる。先ほどの仕内のせいでほんのり熱を帯びた頬を冷ますため、俺は今後の計画を立てることに集中した。

—この洗い物を終えたら、掃除して、洗濯して、そっういえば柔軟剤がそろそろ切れってきたんだっけか……

気づくと俺は洗い物を終えていた。無心になって作業したおかげか、精神的にもだいぶ落ち着いてきたようだ。ふと、顔を上げると居間の方から相変わらずリアはこちらを睨んでいた。

…誰がつれていくものか。

しかし、彼女は明らかに不満気な表情を浮かべている。

「何だよ」

「別に」

「そうか」

やれやれ、やっとリニアも大人になってくれたようだ。そう思って俺は洗面所へと移動した。洗濯をするためだ。

「えいつ」

ふと、完全に油断した俺の背中に柔らかいものを感じた。

「おい!! な、何すんだ!!」

「ずっと考えてた。何で話してくれないのか。つまりは、私のスキンシップが足りなかったってことね!!」

「はあ!? 違えよ!! おい、この馬鹿!! 離れる!!」

「じゃあ十時に何があるか話して」

羞恥心と何か色んなものが混ざって、俺は必死になってリニアの体を振りほどこうとするが、体力的な差は明らかだった。

「離れる!! リニア!!」

「話してくれるまで嫌!!」

「……」

「……」

「……わかった、話すから離れる」

俺の負けだ。このままでは、俺が吐くまで離すつもりはないだろう。

「それで? 十時に何があるの?」

「……」

「聡太」

「その……夕方会ったあの先輩と久しぶりに酒を飲みに行こうってだけだ」

「それだけ？」

黙って俺が頷くと、リニアは心底つまらなそうな顔で肩を落とした。

「何だよ、しょうもない話じゃん。それなら何でそんな頑なに話すのを拒んだのよ。私はもつと重要なことでもあるのかと」

「重要な事？」

「たとえば、合コンに行くとか女の子を紹介してもらおうとか」

つらつらと指折り数えられていくリア充イベント。明らかに俺とは縁遠い話だった。

「いずれにしる、お前には関係ない話じゃないか」

呆れて呟く俺とは反対に、リニアは片手に拳を作り、勢いよく俺に向けて放つ。目の前で止まる鉄拳と共に、彼女は口を尖らせて、

「聡太が女に会いに行くなんて、私にとっては一大事件なの!!」

「そ、そうですか」

突きだされた拳に圧倒され、思わず敬語になってしまふ。間違いない、この女と付き合う男は一生苦勞するだろう。

「あれ？十時に行くってことは夕飯食べて行かないの？」

「飲みに行くからな。心配しなくても皆の分は作っていくよ。それに先輩の奢りだから、俺もちやんと食べて帰る」

「ふーん」

「ちよつと待て、何だ、その顔は」

「べつつにー」

危険だ、非常によくない顔をしている。

「何を考えてる。言つとくが、絶対についてくるなよ!!」

「えー」

「当たり前だろ!!」

リニアは頬を膨らませて俺を見た。もちろん彼女がこのような反応を見せるのは想定済みだ。後はこのミツシヨンはどうやってクリアするかなのだが。

「いいか、俺は遊びに行くわけじゃない。真面目な話をしに行くんだ」

「ふむ」

彼女は腕組みをして真剣な顔をした。どうやら理解はできるらしい。

「先輩に会うのは久しぶりだから、今後の勉強とか資格対策とか、色んな経験を聞いて将来に役立つ情報を集めようと思っっているわけ」

「なるほど」

「それにお前の性格上、飲み屋なんて行ったら人の話も聞かずに飲みまくるだろ」

「うっ」

よし。今の言葉がトドメだったのか、リニアはおもむろに頭を抱えて悩みこんだ。

「それでもお前は俺についてくると言うのか？」

「え、うん」

リニアは即答した。

「……どうして？」

「未来の花嫁だし？」

「誰が誰の未来の花嫁だと？」

「違うの？」

「違う!!」

繰り返した。いくら俺が拒絶しても、彼女はついてくるつもりなのだろう。ならば妥協策を考えねばならない。互いにwin-winになる方法――

「……どうしても一緒に行きたいのか？」

「うん!!」

「はあ……まあ来るなって言っても来るんだろうしな」

「うん!!」

元気な声で返事をするリニアに俺は再び大きなため息を零した。

「わかった……ただし、酒をたくさん飲むな。大事な話をしている時は黙って聞いていること。あの人は俺にとって重要人物だから」

「わかった!!」

俺が了承するや否や、リニアは楽しげに部屋を駆けまわった。

一体いくつなんだ、この女……。

実を言うと俺は、相談はもちろん先輩の前で思う存分、笑い話や愚痴を聞いてほしかったのだ。しかしリニアが来るとなれば、それも満足にできないだろう。色々と恥ずかしく思ってしまう。近しい人間であればあるほど、弱みなんて見せたくないのだ。

「ねえ、聡太。居酒屋!? 居酒屋行くんだよね!？」

「まあ……何で？」

「私、日本に来て居酒屋にまだ行ったことないの!! 初めて!!」

リニアはキラキラと目を輝かせて居酒屋についてあれこれ聞いてきたが、そこまで期待するものでもないだろう。いや、外国人からしたら新鮮なのか？

「それじゃあ、十時だよ。デート」

「先輩もいるのに何がデートだ」

「でもお店までは二人きりでしょ？」

「……もう勝手にしてくれ」

圧倒的なテンションの差に、ついに俺はついていけなくなった。ひとまずリニアの件が落ち着いたところで、俺は家事を再開する。

「……」

ふと、背筋が凍るような感覚を覚えた。

―何だ？

背後から感じる何か、いや何となく予想はついているのだが、後ろに立っていたのは同居人の小学生、いや奏だ。

「か、奏？どうかしたか？塾いくのか？」

「行かない」

「……遊びにでも行ってきたらどうだ？」

「いい」

「そ、そうか」

妙に重たい空気だ。いつも通りの無表情だが、今日は無駄に殺気が籠っているような気がする。要は機嫌が悪いと言う事だ。奏はちらりと俺の隣にいたりニアを見て、再び俺に視線を戻す。

「聡太はでかけるの？」

「え？ああ、十時ごろな」

「そう」

「うん」

「私も行くよ!!デート、デート」

全く空気を読まずにリニアが割り込んできた。

「何がデートだ!!」

「デート……」

ぽつりと奏が零す。

いかん、奏に誤った認識をしてもらっては困る。

「デートじゃない。あれは無視しろ。ただ先輩に会いに行くだけだ」

「……デートだ」



「え？」

「デートでしょ」

「違います」

思わず敬語になってしまったが、奏はひたすらにデートという単語を繰り返す。どこか寂しげな様子に見えるのは気のせいだろうか。

「奏？」

「ばか」

奏は拗ねた様子で吐き捨て、リニアをしばらく眺めた後、ぱたぱたと自分の部屋へと戻っていった。

「何で」

「年頃の女の子ってことかしら」

俺の疑問にリニアも疑問形で返す。

「お前もあの年代はあんなだったのか？」

「私？私もまあ奏と同じような性格だったね、いや、もつと話さなかったかな。その時はまだ茶髪だし、真面目な優等生だった」

「それはお前と同一人物の話か？」

「もちろん。その頃、ハンスと出会ったんだっけかな、いやもつと前か」

一人、過去の記憶を辿るリニアを放って、今度こそ俺は家事を再開する。十時―それまでにやることを終わらせておかなければいけない。

「お、鈴木。やっと来た……か？」

先輩は待ち合わせ場所に現れた俺を見て、一瞬驚きを示した。当然だろう、何故か待ち合わせをした後輩が、若い外国人女性と腕を組みながら登場すれば、誰だって戸惑いを見せるに

違いない。

俺はため息を零したまま、仕方なく口を開いた。

「すみません、先輩。ひとり追加でもいいですか？」

「わからない……何でお前が」

先輩は頭を横に振って宙を仰ぐ。おそらく〇匹ということだろう。

そして俺たち三人は揃って居酒屋の扉をくぐった。

店内の装飾も雰囲気も以前と変わっていないかった。というものの、大学一年生の頃何度か先輩と行った事があったからだ。ちなみに何を飲んでいたかは黙っておこう。

二階奥の窓側のテーブル。外を見ながら飲めるといふ、先輩イチオシの場所だ。先輩の対面に俺、俺の隣にリニアの順で座るが、彼女も少しは緊張しているのか、ぎこちない様子でチラチラと店内を見回していた。

「さてと。何飲む？」

先輩は席につくや否や、いつも通りの調子に戻ったのか慣れた手つきでメニューを俺たちの前に差し出した。

「いや、奢ってもらおう立場なんで先輩が選んでください」

「そこは忘れてなかったか……まあ、でも食いたいもの頼んでいいぞ」

「俺としては話をしに来たようなものですけど」

「いいから、いいから。好きなもの頼め。後輩に奢ってやる金くらい俺だつてあるさ」

「はあ。それじゃあ……」

俺は適当にメニューを選んで注文をしていく。そんな俺を、リニアは溢れんばかりの好奇心を込めた瞳で見つめていた。そして店員が去ると待っていたかのように口を開く。

「ねえねえ、聡太!! 生ビールって普通のビールと何が違うの?」

「そういえばお前、居酒屋は初めてって言ってたな。生ビールっていうのは、あれだよ。あのポンプみたいなのやつから一回一回出してくれるやつ。まあ、出来たてみたいなのだから普通のビールよりは美味しいんだよ」

「へえー!!」

感嘆の声を上げるリニア。そんな彼女を先輩は訝しげな目で見ていた。

「ところで、鈴木」

「何ですか？」

「俺は彼女がどんな人か詳しく聞いていないんだが。一体何者………どういう人かきちんと紹介してくれないか？」

「えつと……」

そういえば彼女だなんだとは揉めていたが、肝心のリニア自身については何も話していなかった。しかし、何て言えば良いのだろう。協会はおるか魔法士なんて話も信じてはくれなさそうだし。

「た、只の友人ですよ」

「いや、そういうことじゃなくて。留学生とかか？」

「留学生ではないけど………これでも立派な社会人で、今は休職中というか」

「休職って日本で？こっちに家があるのか？」

「えつと、まあ……はい。怪しいやつじゃないですよ」

重要な所はぼかしたままだが、簡潔に言うならば今言った通りだろう。しかし案の定、先輩のリニアに対する疑いの目は晴れていなかった。

「……その返答なんだよ？怪しいとしか思えないんだけど。それとも俺、馬鹿にされてんのか？」

「そんなつもりはないです!!」

くそつ……一般人により分かりやすく説明するにはどうしたら……。

ちらりとリニアを横目に見るが、彼女は先輩の顔をきよとした表情で見つめていた。そして平然と口を開き、

「私の名前はリニア・イベリンです。出身はドイツ。大学は出てます。今は休職中で、日本に来ました」

何食わぬ顔で自己紹介を始めたリニアに面食らったのか、今のでだいぶ先輩の態度が和らいだ気がする。

「えつと……何で日本に来たんですか？ドイツにいても良かったんじゃない」

「恩師、お世話になった人が日本にいて遊びに来ているんです。その人の家、大きくてついつい長居しちゃつてるといいうわけです。ちなみに聡太とは仲良しです」

「余計なことは言わんでいい」

先輩からの質問は更に続いた。

「……二人は付き合っているのか？」

「はい」

「いいえ」

ほぼ同じタイミングで俺とリニアは正反対の答えを述べた。

「……どつちが正しいんだ？」

「当然俺です」

「もちろん私です」

またしても同じタイミング。

先輩も諦めたのだろう。大きなため息をつき、やれやれと背中を椅子に預けた。微妙な空気が流れる。しかし、リニアは先輩の様子を気に留めることなく、ずいっと身を乗り出して、

「すみません、あなたの名前は？」

「俺？」

「はい、聡太が先輩先輩って言ってるけど、肝心の名前がわからなくて」

「ああ、そういうえばそうだったね。俺は前田総一郎。よろしく」

そう言って二人は握手を交わした。

「前田さん、聡太って学校ではどんな感じなんですか？」

「うーん、最初は冷たい奴だと思った」

「冷たいやつ？」

先輩とリニアはすぐに親しげに会話を始める。二人とも改まった態度は好きではない方だ。

案外、相性としては合う気がする。

「こいつ元々口数は少ない方だけど、最初の頃は張り詰めた空気がしてたつていうか話しかけにくい雰囲気だったんだ。それがある日から徐々に柔らかくなっていったかな」

先輩と会った最初の頃……おそらく三年前の事件を引きずっていた頃だろう。確かに気軽に話しかけてもらえる雰囲気ではなかったという自覚がある。

「へえ……それで何がきっかけで仲良くな」

「ビール三つです!!」

リニアの質問を遮るように店員がビールを持ってきた。俺たちは何も言わずに揃ってグラスを手取る。まずは乾杯をしてからということだ。

「……」

「……頼んだ、鈴木」

「え、えつと……乾杯!!」

非常にぎこちない音戸だったが、潔い飲みっぷりだ。リニアに至っては一気にグラスの中身

を全て飲み干してしまった。

「あー!!おいしい!!おかわり!!」

「お前、仮にも先輩の奢りなんだから少しは遠慮を……」

「鈴木。そういうお前も『奢り』って言葉を強調するのか」

「それで?さっきの続きをお願いします。二人が仲良くなったきっかけは?」

二杯目のビールを片手にリアは嬉々として先輩に話しかける。

「そんなに気になるのか」

「気になる!!」

「別に俺は普通に過ごしてただけなんだがな」

俺がそう眩くと、先輩は大きな声で笑い出した。

「確かにそうだったな！」

そしてビールを一口飲むと、先輩は去年の話を開いた。

「ある日鈴木が一人で学食を食べていたんだ。いつも人を寄せ付けない雰囲気なのが、皆と同じものを食べているのがなんか面白くてな。一緒に食べようと思って、わざとこいつの前に座ったんだ」

「それで？」

「こいつ最初は俺がいるのに気づいてなくて、ふと顔を上げた瞬間、学部の先輩である俺の顔に気がついたんだ。そんで驚きのあまり盛大に飯を零した。あれは面白かったな」

先輩はくすくすと当時を思い出して笑う。俺も先輩との出会いは覚えていた。人前であれだけ恥を欠いたのも滅多にない。

「それでそのまま片づけていくのが普通なのに、鈴木のはな」

「……先輩、そこまでにしましょう」

「最初に出た言葉が『俺の400円が……』だった。こんなのネタにしかならないだろ!？」先輩とりニアは腹を抱えて笑いだした。俺はひたすら先輩から視線を逸らすしかない。

「普段ぶつきらぼうで話しかけにくい奴だと思っていたのに、あんなに面白い奴だとは思わなかったな。こうしてあれ以来、俺は何かと鈴木に構ってやってるというわけだ」

「別に構ってもらってるつもりは……」

ふいと先輩から顔をそむけると、横でリニアが楽しそうに笑っていた。妙に気恥ずかしい。

「ちよつと先輩にそんな昔の話もうやめましょう!!」

しかし先輩は俺の抗議に構うことなく、依然として去年の話を続けた。

「鈴木が言うには、皆とも話そうと思っていたらしいが、タイミングが掴めずに段々と面倒臭くなっていただけだったらしくてな。それで俺が暇な時相手をしてたら、いつのまにか仲良くなつてたってわけさ」

先輩の説明は非常に簡潔且つ、嘘偽りのない事実だった。俺は一年の頃、サークルにも学部内にも僅かの知り合いしかいなかった。先輩と仲良くなり、色々な行事等に連れまわされたのだが、それでも俺はそんな生活が嫌ではなかった。

去年の初々しい頃を思い出し、俺はひとり、少しだけ情緒的な気分には浸っている中、リニアはずっと先輩から俺の学内生活について色々と言っていた。

そして俺の視線に気づくと、彼女はふわりと赤みを帯びた顔で笑う。

「私の知らない聡太がたくさんいて、すごい新鮮」

それは――

「……まあ、お互いすごい離れた場所にいたからな」

急いで俺は正面へと顔を戻した。あんな近くでそんな風に言われたら、誰でも照れるに違いない。

「逆にお嬢さんが知ってる聡太はどんな感じ？勉強とバイトしか頭にないつまらない奴？」
先輩の問いかけに最初こそ笑っていたリニアだが、すぐに腕組みをして真剣な顔で考えだし、そして再び笑顔に戻ると、

「確かに聡太は勉強とバイトばかりだけど、仕事ができたら嫌々言いながらも結局手伝ってくれるから……つまらない奴とは思ってないです」

「……確かにつまらない奴じゃないね」

その点に関しては先輩も同意らしい。

「だから本当に頼もしい友人です。私が大変な時も、辛い時も、いつも隣にいてくれて……まあちよつと鈍いところもありますけど」

「俺が鈍い？」

「鈍い!!」

アルコールのせいもあり、リニアの声はいつも以上に声大きい。これは下手に話を広げたら面倒臭い奴だ。俺はリニアに言われるまま、云々と頷き返していたが、ふと、彼女は思い出したようにビールへと手を戻した。

「それにしても、私が聡太と初めて会った時は、もつと丸かったのにな」

「へえ、そうなんだ。じゃあ今度は高校の頃の鈴木を教えてくれよ」

先輩とリニアは俺という共通のおもちやをネタに、随分と親しくなったようだ。

「聡太はね、本当に良い奴だったの」

「へえ」

「よくない事が起こると、真っ先に駆けつけてくれる。とても情熱的な人でした」

「それは意外だ、『俺の400円……』の高校時代がそんな感じだったとは」

「まあ、今でも根っこの部分は変わってないと思いますよ。ね？」

リニアはニコリと笑いかける。

「俺が知るか。俺は今も昔も変わらない、ただただ日々を過ごしてるだけだ」

「むう。面白くない反応」

彼女は唇を尖らせて、拗ねたようにそっぽを向く。やれやれ一先ず俺の話は終わったのだろうか。そろそろ違う話題に行きたいのだが。

そう思つて、俺もビールへと手を伸ばす。もう中身も終わりそうだ。お代りを頼んだら、今度はもつと真面目な話をしよう。と、その瞬間。グラスを掴もうと思つていた俺の手の目の前に違う手が

「えいつ」

「あ!!」

リニアが俺のビールを手に取り、一気にグラスを傾ける。

「ぷはーっ」

「おい、リニア!!それは俺のだろ!!」

彼女はしたり顔で俺へと振り向く。先ほどの返事が悪かったせいか、いや、ただの酔っ払いだからか。仕方なく、俺は二杯目のビールが来るのを待つことにした。

「そういえば、先輩。学校の方は大丈夫ですか？」

互いにお代りが来たところで、俺は先輩へと問いかける。だが先輩は俺の質問を聞くなり、眉間にしわを寄せ、

「何故、酒を飲む場でそんな話をしなければいけない」

「……重要な話があるから俺を誘ったんじゃないんですか」

「俺はただ単にお前と飲みたかっただけだ!!」

「本当ですか？」

「俺がお前に悩みなんて話すと思ったのか？」

「え、まあ」

「俺は本当にただお前と酒が飲みたかっただけだ」

この人は……大丈夫なんだろうか。

俺が黙ってしまったせいだろう、今度は先輩が俺に問いかける。

「お前こそ悩みでもあるのか？」

「いや、そういうわけでは」

「そうだろ。大体、こんな所に悩みなんて持ってきても解決なんてすることない。本当に悩んでいるなら、もつと親身になってくれる人にちゃんとした場で打ち明けた方がいいに決まっている。親でも親友でも」

そこで先輩は、一度言葉を切った。そして、リニアをちらりと見つめ、

「女友達でも」

「はあ」

「……ここでは否定しないのか」

「あ、はい。友達なんで」

すると、突然リニアが俺たちの間に顔を出した。

「今は!! いずれ聡太は私と付き合うんだから!!」

「はいはい」

「ちよつと!! 適当に流さないで!!」

彼女は俺の服の裾を摘んで揺する。ここで抵抗する気力も今の俺にはなかった。そんな俺たちの様子を先輩は軽く笑いながら眺めている。

「鈴木、案外お前にはこういう彼女が合うのかもしれないな。お嬢さんはコイツのどんな所

が好きなんだ？」

顔は笑っているものの、先ほどからずつとおつまみの枝豆を飛ばしてきている。おそらく内心穏やかではないのだろう。

「全部……かな」

「ほう」

「歩く姿も食べる姿も好き。料理もしてくれるし、優しいし、顔もまあ合格点かな。たまに冷たくしてくれるのも魅力的」

「ははは!! 本人目の前にしてここまで言う女も初めて見た!! 面白い!! 鈴木、お前本当に良い人を手に入れたな!!」

「いや、その……別にいらないというか」

「まあまあ、そう恥かしがらな。仲良くしろよ」

「いや、あの先輩」

「こんな良い人と知り合うのも簡単じゃないんだ」

そこで先輩は一息つくくと、

「とにかく俺が言いたいののはな、悩みがあるなら悪戯にこんな所で話しても仕方ないってことだ。真面目な話は飲み屋ではするな。ちなみに、俺はお前に悩みを打ち明けるつもりはない!!お前は大事な弟分だからな!!」

そう言つて先輩はグラスを傾ける。

誰がどんな悩みを持っていても、どんな気分でも、絶対に態度を変えない。前田先輩はこういう人だ。いつも通りの態度で接してくれる。いつも通りの先輩のやり方で話してくれる。これは本当にありがたいことだと俺は思う。

「そういえば先輩、資格勉強以外に何かしてるんですか?バイトとか」

「いや、ご存じの通り単位がアレだからね。一応冬期講習受けてるよ」

「へえ、有料のですか?」

「ああ、おかげで今月は結構ギリギリなんだがな。まあ仕方ない」

「しつかり単位取ればよかったんですよ……」

そうは言ったものの、今俺が口付けているお酒も先輩の貴重なお金だと思うと、一気に気が引けてきた。そんな俺の僅かな変化に気づいたのか、先輩は大丈夫だと言って肩を叩いてくれる。

「それはそうと、リニア・イベリン……だっけ？珍しい名前じゃないですか？ドイツからつて言つてたけど、日本はどんな感じ？」

「うーん。ドイツから来たつて言つても、ここ三年間はずっと色んな国を回つてたんで本当に来たばかりつて感じなんですよね。だからまだまだ知らない事だらけで」

「へえ」

「うん、それでも思う事はあります。実際に色んな世界回つてみたけど、結果的に人間が住むところはみんな同じなんだなつて。特にこういう都市はどこも似たり寄つたりです。もちろん田舎は色々違つてきますけど」

「そんなものなのか」

思わず俺も感嘆の声を上げてしまった。

「めつたに私も他の国の話はしないもんね。初めて来た時は色々話してあげようと思つて

たけど、聡太がいいって言うから」

「そうだっけ」

「そうだよ」

しまった。またひとり先輩を置いてけぼりにしてしまった。恐る恐る先輩の顔色を伺うと彼は笑いながら、懐の煙草を取り出していた。

「つまり、日本に対するイメージはそこまで悪いものじゃないってことか」

「もちろんです!!大切な人たちがいる国、私にとっても大事な国です」

「だってよ、鈴木くん」

「……そうですね。何か？」

俺が言葉を返すと、先輩もリニアも不満げな顔を浮かべる。どういう反応を返せばよかったのか。

「もうこいつの話はいいですよ。話題変えましょう」

すると先輩は、妙に真剣な顔をしながら口を開いた。

「俺が今行ってる冬期講習の先生が面白い授業を教えててな、今まで安田先生って人が教えてたんだけど仕事ができて新しい人に代わったんだが、それが外国の人ですごいんだ」

「すごい……?」

「なんとというか、典型的な学者タイプというか、政治家?」

「先輩、学者と政治家では大分違いますよ」

俺の突っ込みを受け流し、先輩はなおも神妙な顔で頷く。

「だからそれが不思議なんだ。学者の雰囲気なんだけど、態度とか思想が政治家っぽいって言えばいいのかな」

「うーん、教授って言っても色々いますけどね」

すると今度はリニアが口を挟み、

「私の大学にもそんな人いたよ。すごい奇癡な感じの教授とか」

先輩は俺とリニアの反応を受け止めながら満足げに頷く。そして再び口を開いた。

「その教授が教える授業も面白いんだ。鈴木、お前明日一度受けてみたらどうだ？来年の専攻選ぶときに役立つかもしれないぞ」

確かに有料講座だし、将来的に役立つかもしれないな。俺が頷くと、先輩は隣のリニアにも顔を向けた。

「君も一緒にどう？」

「え、私も？」

「楽しいよ？外国人なのに日本語も上手だし、ロコミが広まって冬期講座受けてない人も紛れてるとかって噂もある位だし」

俺とリニアが興味深げに聞き入っていると、更に先輩は語り出す。

「たしかアメリカ？カナダだったかな。北米の出身で有名な大学で教授をやってる人なんだと。どうだ、鈴木。明日行くか？」

「じゃあ、行きます」

「行くの!？」

すると今度はリニアが驚いた表情をする。

「少し興味あるし、専攻選ぶときの参考になるかもしれないし」

「べ、勉強しにいくってことだよ？」

「いや当たり前だろ」

こいつは何が言いたいのか。

俺が不思議そうにリニアを見ると、彼女は突然ぶつぶつと何かを言い始めた。

「そ、それはつまり私も一緒に行くとしたら、一緒に登校して……一緒にお昼を食べて、一緒に図書館に行つて、一緒に下校するってこと？」

「そうだろ」

俺の返事を聞くや否や、突然リニアは先輩に向かって身を乗り出した。

「そ、それって本当に私も行っていいの!？」

「大丈夫だよ」

先輩がにこやかに答えると、リニアはガッツポーズをして立ち上がった。相変わらず変な女だ。

「先輩、もしかしてこれを言うために今日俺を誘ったんですか？」

「まあ、それも少しある。お前の場合、少しくらい真面目な話がないと拗ねるだろ」

「別に拗ねたりしませんよ!!」

急いで否定するも先輩は笑う事をやめない。

「たまにはしようもないこと考えてもいいんだよ。お前は目の前の事を全部受け入れる性格してるから、真面目な話は少しだけでいいんだ。それにお前の場合、意味もなく酒を飲むのも嫌だろ？先輩からのありがたい気遣いってこと」

そう言っつて先輩は誇らしげに胸を張った。

「そう言えば先輩。その教授の名前は？」

「何だっけな、たしか……ハイティントン。エドモン・ハイティントンって言ってたな」

翌日。

先輩に教えてもらった教室の前には俺一人がいた。リニアも一緒に行くとは言っていたものの、見かけより酒が弱い彼女は昨晚、幼稚園に戻る前にダウンしてしまった。結局俺が彼女を背負って帰ったわけだが。

そのような経緯で俺は今、先輩が言っていた講座を受けている。金髪の外国人先生は、英語を交えながらも非常に流暢な日本語で講義をしており、一般の教授と変わらないほど聞きとりやすい内容だった。講義自体も普通のものときほど大差は無い。

先輩が面白いと言っていたのは何だったのだろうか。そんな事をぼんやりと考えながら受けていると、あつという間に三十分もの時間が流れていた。特に物珍しいこともない退屈な授業に、思わずため息を零す。

そしてちらりと窓を眺めた。きつと顔には情けないと書いてあるだろう。講義が始まってか

ら気づいたのだが、先輩の姿が見当たらない。昨晚はそこまで酔っていなかっただけだ。おそらく面倒臭かったのだろう。つまり何が言いたいのかと言うと、俺は先輩に騙されたのだ。

「いやいや、ポジティブにいこう」

俺は心に積る重たいものを払うように、顔を上げた。そうだ、仮にもこれは講義だ。必ず俺のためになる内容があるはずだ。

事実俺のほかにも生徒はおり、彼らは俺とは違い、熱心な様子で授業を聞き入っていた。俺だけがこんな気持ちでいるのは失礼ではないか。

「しかし―、薦めた人間はサボり。一緒に来ると言ってた人間は寝坊」

どうにも意欲的になることは難しかった。

「大体、これは何の講義なんだ……」

「それじゃあ、最後に今までの流れを整理してみましよう」

気がつくまで講義は終盤に差し掛かっていた。六十分講義なのか。

さつさと終わらせて昼飯を食べに行こう。その後は普段通り、図書館に行つて―、

「一般的にコミュニケーションというのは、情報や意思の伝達、それを解読する過程を言います。よく『言葉の意味が解らない』という言葉がありますが、これはまさに相手が自身の言った言葉―情報、あるいは意思を解読できない時に使われます。そこではコミュニケーションは成り立っておりません。我々はコミュニケーションを成り立たせるために、相手に自身の意志を伝える努力をしなければいけません」

生徒を前に講師は熱心に語った。三十代半ばの西洋顔に綺麗な金髪が映える。一見気難しそうな外見だが、あまり整っていないひげがラフな印象を与え気さくな雰囲気にも見える。

「コミュニケーションを成立させるためには、まず情報あるいは意思を持っている者と、それを受け取る相手が必要です。しかし、テレビのニュースやマスメディアはコミュニケーションとは言えません。あれらは情報を一方的に流すのみ―というのがありますが」

そこで彼は言葉を切ると、口元に手を当てて考え込んでいた。

「ええと……すみません。上手いこと合う日本語が見当たらないというか、難しいですね」
照れくさそうな表情で外国人教師は謝罪する。すると、よくあることなのか周囲の生徒はくすくすと笑みを零していた。

「まあ、これも私という個人の考え方なので、皆さんは皆さんで独自の考えを出して下さい

ということにしましょう。大体、こんな難しい題を六十分で説明できるわけがないですからね」

困ったという風に両手を上げると、講師は再び生徒に向かって口を開く。

「よく本ではコミュニケーションは符号を解読する事と言われていますが、人と人の対話で解読するのは頭ではなく心です。コミュニケーションは相手を理解しようとする行為だと私は思うんです」

まるで語りかけるように話し終わると、講師は今までとは一転して気楽な様子で身体を伸ばした。

「元々、この講義は別の方が担当する予定だったんですけどね、偶然私のところにこの大学で親交のある人間から連絡があつて来たんです。誰も生徒がいなかったらどうしようと思いましたが、良かったです。皆さんありがとうございます」

最後にと講師はぐるりと教室中を見渡す。だが俺の方を見ると、どこか確かめる様な視線でしばらく見つめていた。

俺が正規の受講生じゃないとバレたか……!? 申し訳ない気持ちで俺はさつと視線をずらすと、しかし講師は暖かな笑みを向けてきた。

「誰かに連れてこられたのかい？」

「え？」

「見かけない顔だったからね。知り合いにでもこの授業に出るように勧められたのかい？」
俺は意味がわからないと言った顔をしていたのだろう。講師はニコニコと笑いながら再び口を開く。

「生徒たちには言っておいたんだ。自分の代わりに誰かを出席させれば本人も出席扱いになるってね」

やはり俺は先輩に騙されただけだったのか。予期していた真実を打ち明けられ、一気に疲れが出てきた。そんな俺を周囲の生徒もニコニコと笑いながら見ている。なんだか不思議な気分だ。

「とにかく最後まで聞いてくれてありがとうございます。それでは最後に――、この講義は冬休み一杯で終わりです。おそらくあなた方が私と会う事ももうないでしょう。それでも私の授業を通して、より一層あなた方が学問への追求を深めてくれる事を願っています。我々が勉強するということは、人間の好奇心や名誉、金銭など様々な理由がありますが、やはり私はこれに尽きると思います。勉強をすれば一人の人間として自身の役割を果たす事が出来る

可能性がより広がると。これが我々が勉強——すなわち何かを学ぶ理由だと私は思っております。それでは、これで本当に最後にしましょう。ありがとうございました」

講師が深々とお辞儀をすると同時に、終了のチャイムが鳴り響く。生徒たちも各々帰宅の準備を始めだした。俺も教室を後にしようとしたところで、ふと、講師が俺の目の前に立っている事に気付いた。

「あ、あの」

「君、少し付き合ってくれないか？」

四階の学科研究室。講師の後に続いて俺も中に入った。研究室内は思っていたより片付いていて少し意外な印象だ。

「臨時の場所だからね。そこまで私物はないんだ」

まるで俺の考えを見透かしたかのように答える講師。ただでさえ普段近づかない場所にいるせいか、やけに心臓の鼓動が早まっていた。

「ふむ、結構疲れたね。さて、君は知り合いの薦めで来たということだ。良かったんだっけ？」

「は、はい。知り合いの先輩に勧められて」

「大丈夫だよ。そういう生徒はよくいるんだ。それにしても随分と疲れて見えるね、バイトや勉強で忙しいのかい？」

「そうですね。でもまあ他の人も同じように大変でしょうから。それに今日疲れているのは……昨晚遅くまでお酒を飲んでまして」

恥かしかつたが、実際昨日はバイトに行っていないので思わず本当の事を漏らしてしまった。すると講師は呆れた表情を見せるでもなく、大きな声で笑い始めた。

「つまり二日酔いということか！」

「は、はい」

先ほどの講義をしている様子とはまるで違う。とても気さくで話しやすい雰囲気だった。

「先生はどちらの国の人ですか？」

「私？私はオーストリア人だよ」

「日本語上手ですね」

「そう？ありがとう」

当たり障りのない会話を終え、研究室内は沈黙に満ちた。特に話す内容もなく微妙に気まずい。

「えつと……何か話があったのでは？」

「ん？あー……そうだね。特にはないよ。ただちよつと君と話してみたかっただけだ。この部屋に来たのは君が二番目でね、中々誰も来てくれないんだ。だから時々遊びに来てくれると嬉しいんだが」

「は……はあ」

要は雑談相手が欲しいのか。あの時偶々目が合ってしまったから、連れてこられたのかもしれない。

彼と話をしたくないわけではないが、どこか気まずい。俺は早々にここを出るべきと判断し、ゆっくりとドアの方に後ずさった。

「えつと、すみません。ちよつとこの後用事があるので」

「そうか、またきてね。鈴木聡太くん」

「……どうして俺の名前」

「出席簿に名前があるじゃないか」

「……俺はさっきの授業、正規に登録していないはずですけど」

すると講師は、あつと小さく息を漏らし、

「最初にアンケート用紙を渡した時に見たんだ」

そういえば一番初めに何かのアンケートで名前を書いた覚えがある。つい自分の名前を書いてしまい、正規の生徒ではないかとばれるか不安だった。しかし、名前を書いただけで俺だとわかるのか。

妙な気分に関われたものの、俺は再びドアノブに手をかけた。

「それじゃあ、失礼します」

「うん、また遊びにおいでね」

そして俺は研究室のドアを閉める―その瞬間、

「そういえば、金色の魔女は息災かな」

ま

聞き間違いだろうか。

金色の魔女―先生を知っていた？何故？どういうことだ？

俺はドアノブを握りしめたまま、たった今出てきた扉を見つめていた。入る時とは違う、それは巨大でとても重たい鉄の扉の様にさえ思えてしまう。

俺の聞き間違い、きつとそうだ。そうにきまっている。研究所の人間が大学内にいるわけがない。頭の中で必死に自身にそう言い聞かせるも、体は正直だった。額に浮き出る冷や汗が止まらない。俺は急いで階段を駆け降りると、逃げるように校舎を後にした。

「やばい、やばい、やばい!!」

大学構内の敷地を全速力で走り抜ける女性。彼女の額には冬だというのに、うつすらと汗がにじんでいた。服装もやや寄れており、慌てて家を出てきたことが明らかである。

「もう!!あのバカ、起こしてくれてもいいじゃない!!私の記念すべき初登校がー!!」

構内に虚しくこだまする彼女の嘆き。彼女ーリニアが目覚めたのは、昨晚鈴木と約束した講義の終了十分前だった。勢いよく飛び起きた彼女は転がるように幼稚園を後にし、ここまで走り続けてきたわけだがー、

「やっぱり遅かったか……」

教室内の生徒は僅かしかおらず、彼らもすぐに教室から出て行った。案の定、彼女は講義に間に合わなかったのだ。だが、学内デートの夢が潰えたわけではない。リニアは顔を上げると、再び構内を走り出した。

「きつと聡太は図書室にいる……!!」

入口で見かけた構内図を思い出し、リニアは一直線に図書室へ向かった。

「たしかこの駐車場を抜けた先に……」

ふと、彼女の視界に車の前で佇む女が映った。何てことはない、特に気にすることはない一場面。リニアはすぐに視線を戻し、図書館へと足を進める。

「……」

その後ろ姿を女はじつと見つめていた。それはまるで驚きと怒りを混ぜた様な冷たい視線で。

「おや？誰かと思ったら私の研究室お客様第一号のゴトー君じゃないか」

「変な呼び名はやめろ。リニア・イベリンを発見した」

女の発言に男は豪快な笑みを浮かべる。

「ほら。ゴトー君、君も笑って。笑顔は幸運を運んでくれるよ」

男が呼びかけるが、それでも彼女は眉ひとつ動かさず彼に冷ややかな視線を送った。

「それで、ゴトー君。リニア・イベリンはどこで見たんだい？」

「図書館に向かっていた。鈴木聡太を探しているようだった」

「ほう」

女は余裕げな表情の男に一步近づくと、

「ここに鈴木聡太が来たらしいな」

「ああ」

「今後はどうする」



「さあ。それより私は、何故今も君が私の傍にいるのかが知りたいね」

ニコリと笑いかける男に対し、ゴトーは、やはり感情のわからない声で返答する。

「私はベルコルと約束した。お前の護衛をすることを」

すると男は自身の髪を触りながら、ふと声のトーンを重くした。

「ゴトー君、急進派は瓦解した。君が私を守る義理はない。ベルコルはもう死んだんだ」

「黙れ。お前のような人間に指図される謂れはない。ベルコルと約束したから、私はお前の傍にいるだけだ」

「やれやれ、それは有り難いことだ」

淡々と自身の主張を述べるゴトー。その物言いにどこか好感を持ったのか、男は再び表情を戻して笑いかける。

「それにしても、相変わらず綺麗な黒髪だね」

「な……!!」

「ああ、そんな恥かしくなくていいよ」

「っ……!!」

ゴトーは込み上げてくる怒りに耐えられなかったのか、顔を真っ赤にして勢いよく扉を閉めて出て行った。そして研究室には再び静寂が戻る。

「普段なら誰も来ない場所に二人も来てくれるとは……良かったな、ハイティントン」

男は自身の名前を口にし、ふっと笑みを浮かべた。

「さて、これからどう動こうか」

ゴトー・フリードリヒ。これは彼女の名前だ。一見男性のようにも思われる自身の名が、彼女はあまり好きではなかった。そのため誰かに自身の名前を呼ばれると、自然と顔が強張ってしまふ。その癖は大人になってからも治る事はなかった。

彼女の家系は数少ない、古くから研究所と縁深い家柄だった。彼女の両親は共に研究所で働

いており、幼いころから彼女も研究所を出入りしていた。それ故、彼女が研究所の一員となるのも必然のことだった。

しかし、彼女が所属したのは両親とは正反対の思想、異端集団とも言われていた急進派だった。

急進派。研究所内で最も極端な思想を掲げる集団。血が流れなければ成果は出ないと考え、早くから協会と対立する道を選んでいた。1900年以後、度々協会と揉め事を起こしてきた彼らは、自然と研究所内でも危険視され、後に彼らの歯止め役として穏健派と呼ばれる集団が出来たのは当然のことだった。

急進派と穏健派、双方の思想は異なれども共に歩んできたのは確かだ。急進派の出す犠牲を糧に穏健派も高い知識を得る。それは研究所の発展にもつながる。

ところが近年、彼らの溝は深まっていた。

そもそも個人主義の集まりとして創立された研究所であるそれは、義理や人情というものは一切皆無であった。この創立当時の思想は二種類の人間に分かれて受け継がれている。

個人主義という思想を色濃く受け継いだ者たち。彼らは原論主義者と呼ばれる者たちだ。急進派でも穏健派でもない彼らは、組織がどのようになっても全く関係ない。彼らが研究所に

入った理由は研究をするためであり、これといった思想は持っていないのだ。それでも彼らは研究所内の人間に白い目で見られる事はない。事実、彼らの成果は研究所の繁栄には欠かせないのだ。

そして創立当時の思想そのものを最も受け継いだ者たち（その最たるものたちが急進派と呼ばれるのだが）は、協会の存在そのものを否定する者たちだ。協会の行動は世界にとつて間違っていると思つて疑わない。そこで団結したのが彼らだった。彼らは原論主義者とは違い、研究や個人的な活動は行っていないなかつた。しかし、協会との対立では話が違ふ。協会と対立する時のみ、彼らは一団となつて戦うのだ。

だが、彼女は知つていた。間違つているのは自分たち研究所側だと。それでも彼女は研究所側につくしかない。研究所と関わつた家系に生まれ、当たり前のように彼らの思想を受け入れていたからだ。誰よりも研究所側の行動を知つていても、彼女はそれを止める事も異議を唱えることもなかつた。何より彼女も協会の姿勢だけは、どうしても受け入れられなかつたからだ。今あるもの、現在だけを重視するのはおかしいと。

「寒い」

ゴトーはふと、心中にそんな感情を抱きコート裾を微かにつまんだ。

—急進派に入った理由。

彼女自身、おぼろげな記憶ではあるがこれだという確信はある。

幼いころ、両親に手を引かれて研究所へ行った時の記憶だ。自身の両親と談笑している若い青年。外見は若い、どこか大人びた—老いたといつてもいいだろう雰囲気のある青年。

ゴトーは何故か彼から目を逸らす事ができなかった。やがて彼女の視線に気づいた青年は、ゆっくりと腰を降ろして彼女の頭をなでる。とても幼い時の記憶だが、彼女は覚えていた。

その後も彼の傍を離れなかったゴトーを見て、両親は大層不安げだった。

正確な年齢もわからず、自身らの思想とは異なる男。しかしゴトーはそんな彼に惹かれて行った。年齢不詳の怪しげな雰囲気、感情を表に出さない行動。

そして彼女は急進派に所属する事を望んだ。親の激しい反対も退け、自身の研究に没頭する日々。急進派の一員として彼女は様々な事を学んだ。

そして今から数年前の重大事件。その能力は前回の保持者の記録が研究所内には大量に保管されている。それを元に彼らはその能力に対抗するための手段を考えるのだが、あの事件は

違った。今までに確認されていないものの能力―自身の運命を開拓する力『Inga』。

この前例のない特異能力は研究所にとって非常に驚異的な存在だった。

当時、研究所内では激しい論争がおこなわれていた。Eの保持者の青年をどうするか。急進派はもちろん彼を処理する事を主張したが、穏健派はそれを断固として反対した。何も知らない未来ある青年を無残に殺すとはいかがなものか。と。

ゴトーは彼らの論争を冷たい表情で見ていた。今まで大勢の人間を犠牲にしてきた彼らが、青年ひとりの命をそこまで惜しむのが滑稽で、愚かで、理解しがたかった。

呆れたようにその場を去ろうとした中、彼女の背後で上がった声。それは原論主義者の中でも最も原論主義者らしくない、穏健派と急進派の調停役とも呼ばれていた男―エドモン・ハイティントンだった。

「私も青年を殺す必要はないと思う。急進派の君たちが言いたいこともわかる。だが、今の時勢を考えてみてくれ。無残に殺す必要もないだろう」

そうやって彼は話を続けた。彼が提示したのはある可能性の話だった。「etcの文書」。伝説、幻と呼ばれる書物。それが協会の旧支部であるパリの地下室に隠されているという話だ。

「etcの文書。これは人間が持っている特殊能力のetcを学問化したと言われている噂の書物だ。君たちも耳にした事があるだろう。私が言いたいのはこうだ。青年を拉致し、彼の能力を利用してetcの文書を探し出す」

当然のごとく、室内は嘲笑と失笑で満たされた。それでもなお、ハイティントンは冷静な声音で続ける。

「十二年前、etcの文書が盗まれたと言う情報。あれは真実なのかもしれない。十二年前、これは金色の魔女が目覚めた時期と重なる。仮にこれを盗んだのが彼女でないとしても、盗難という言葉が出る以上、それはetcの文書があるという可能性を充分高める証拠のひとつだろう」

『青年を殺さず、野放しにもしない』

ハイティントンの意見には多くの異論があつたが、急進派と穏健派のトップの合議により結果的には肯定された。そして後にin.g.シヨックと呼ばれる大事件が起こったのだ。

結果は悲惨だった。

急進派は壊滅的な状態に陥り、穏健派もかなりの被害を被った。ゴトーの両親もこの事件で命を落としてしまった。彼女が急進派に所属してから、一度もまともな会話をせず別れる

ことになったのだ。

その後、事件を先導した急進派は弱体化し、勢いも失った。彼女はこれといった成果も上げられずにひとり故郷へと戻っていった。

それでも昨年。突然ベルコルから連絡があったのだ。OTCの文書を手に入れる計画を立てていると。初めは開いた口が塞がらないほどの衝撃と呆れがあったが、結果的に彼女はベルコルに従う事にした。

脳内に浮かんだ、幼い頃の記憶が彼女をそうさせたのかもしれない。彼の行く末を、彼の目的を知りたかったがために。

ふつと彼女は白い息を吐く。冷え切った廊下には鮮明に彼女の息遣いが浮かんだ。

—ベルコルはもういない。

数か月前の戦闘で行方不明になったという。唯一生き残ったケラーでさえ、固く口を閉ざしたままだ。急進派は終わった。そう確信した彼女だったが、それでもここ日本を離れないのには理由があった。

ベルコルとの最後の約束。

『ハイティントンを護衛しろ』

ベルコルが亡くなった時点でこの契約を破棄しても良かったのだが、彼女はしなかった。何故か。彼女自身もわからないでいる。

「あれ？帰ったんじゃないの？」

男は再び顔を出した女に向かって、からかうように視線を向けた。意地が悪いのか、彼女はつんとした表情でドアの前から一歩も動かない。

「勘違いするな」

「ん？」

「お前を守るのはベルコルとの約束だからだ」

「はいはい。私は必要ないって言っているんだけどね」

「うるさい!!」

男―エドモン・ハイティントンは目の前の彼女の機嫌も知らず、柔和な笑みを崩すことはなかった。

「ゴトー君。笑った方がいいと言っただろう。同じパターンの繰り返しは私もつまらない。それに何より、せつかくの綺麗な顔が台無しだよ」

ゴトーはじとりと眉間のしわを深める。

「それよりどうしたんだ？外で待機していると思っただけ」

周囲の本を片付けながら、何気なく訊ねるハイティントンだったが、返ってくる声はなかった。

「うん。まあ話したくなければいいんだけど」

黙々と自身の作業を続けるハイティントン。そして思い出したように、彼は腕時計へと目をやった。

「おや、もう十二時過ぎだ。そろそろお昼でも食べに行こうか」

「外は寒い」

着替えを取りに行こうとした彼の背中に、予想外の声が届いた。

「外は寒い。だから中に来た」

「ああ……そうだね、今の季節は寒いね」

一瞬戸惑いを見せたものの、彼はすぐにいつもの調子に戻った。

「うん、それなら今出るのはやめた方が良いかな。まだ身体が冷え切っているだろう」

瞬間、はっとなつてゴトーはその真つ赤な顔をあげた。ハイティントンはそんな彼女の様子を気にも留めず、ポットから二人分の小湯をコップに注いでいる。

「コーヒーは身体によくないから、ただのお湯になっちゃうけど。緑茶も私はだめだね」

「ひどい待遇だな」

「君は私のボディガード。客じゃないんだろ？」

ニコニコと笑う男。きつと彼に口で敵うことはないのだろう。そう思ったゴトーは静かにコップに注がれたお湯を口にした。

「それで。ここに来た本当の目的は何だ？」

「目的？ああ、前に言わなかったけ。私は彼を見に來ただけだよ。どんな立派な青年に成長したのか。まあついでにリニア・イベリンも見ておきたかったからな」

「リニア・イベリン？」

「ああ、今説明すると長くなる。それは後で話すよ」

するとそこで会話が途切れたのか、彼らは揃ってカップを傾けた。

「それにしても……こんなお付き合いを始めるとは思ってもみなかったな」

「は？」

「四十五にもなって二〇代の女性とお付き合い……長いこと生きていると色んな経験するもんだね」

ハイティントンは窓の外を眺めて小さく口元を緩める。

「お付き合いというのは訂正しろ。私はお前を守るために一緒にいるだけだ」

「世間ではそれを付き合っていると言うんだよ」

そういつてハイティントンは大きな欠伸をする。

「私の推測が確かなら、彼はまだ自分の能力をわかっていない」

ふと、低い声色が部屋に響く。

ハイティントンはすつと目を細め、目の前の女性―いや、ゴトーを見た。

「ingだよ……可哀そうな奴」

「私の資料によると、金色の魔女と協力関係のようだが」

「ああ、だが自身がゴトーの保持者なのだとは想像もしていないだろう。いや、むしろ彼らの周りがそれを必死に隠していたようだな」

「何故？」

ハイティントンは机をコツコツと叩きながら、ゴトーの問いに答えた。

「手に負えなくなるから。当時の彼は十六歳。自身のせいで世界各地で紛争が起こったと考
えてみる。普通の人間なら耐えられない」

「私は耐えられると思う」

「さすが鉄の女性と呼ばれるだけはある」

静かに笑う男に対し、ゴトーはやや口調を強めながら、

「他に隠す理由はないのか」

「……彼の周囲が彼を大切に思っているから。とか」

「……」

「大切な人が傷付くのは見たくない……そういう風に思ってくれる人間がもつと世界中にい
てくれたらいいのにね」

何も言わないゴトーに対し、ハイティントンは静かに独り言を呟く。そして、エドモン・ハ
イティントンは、ゴトー・フリードリヒを真つすぐと見つめた。

「私の計画は、彼に自身の能力が一体どんなものかを教えるつもりだ」

「それに何の意味がある」

「いや、少々腹立たしくくてね。周囲の人間が頑張っていると言うのに、当の本人は何も知らずに平凡と暮らしている。それに――」

「それに？」

「彼ももう子供じゃないんだ。真実を知るのも悪くないだろう」

「……金色の魔女が制止する可能性は？」

「さあ。彼の命が脅かされない限り大丈夫だとは思いたいね」

そう言っただけでハイティントンは机の上にカップを置いた。

「どうだい？身体は温まったかな」

「……別に」

ぶっきらぼうに答える彼女に向かい、彼は窘めるようにため息を零した。

「その口調どうにかした方がいいと思うよ。せっかくの綺麗な顔には似合わない」

「うるさいっ!!」

「あ……でも今のは割といいかも」

罰が悪そうに目を逸らす彼女を前に、ハイティントンは楽しげに笑う。

「ベルコルが一体何を考えて君を私の護衛にしたのかは知らないが……退屈はしないな」

「馬鹿にしているのか」

「まさか。君は面白いね、だから私は君が護衛についてくれて非常に満足しているよ」

ここで反論してもまたからかわれるだけだ。そう思ったゴトーは深くため息を零して、彼の言葉を無視する。するとハイティントンもそれ以上は何も言わなかった。

「さて」

そして傍に掛けてあったコートに腕を通すと、彼はゴトーへと振り返る。

「行こうか」

「何か不満でも？」

狭い車内。ハンドルを握っているゴトーはちらりと隣に座る男の様子を窺った。

「もう少し温度下げてもいいんじゃないかな」

「このくらいが丁度いい」

きつぱりと告げる彼女に対し、男は諦めたように座席へ背中を預けた。

「……近いうちに何か行動を起こしたい。だが金色の魔女はもちろん、時宮葵やリニア・イベリンがどのように動くかもわからない、君も協力してくれるね？」

「私はお前を守れと言われている」

「助かるよ、ありがとう。君を派遣してくれたベルコルも、思っていた以上に中々良い奴だったんだな」

「……わかればいい」

「リニア・イベリン」。彼女がこの名前にしてから五年、あるいは四年が過ぎた。正確な年数は彼女自身でさえ把握していない。それでも彼女はこの名前を気に行っていた。

以前の名前は非常に長かった憶えがある。それ故、家の者は彼女を『ロミ』と呼んでいた。しかし、ロミという名前を彼女はあまり好きではなかった。それは彼女の幼少時代を象徴する名前であり、自身が家に縛られていた頃の記憶を必ず呼び起こすからである。

彼女の父親は子供に対し、あまり関心がなかった。決して心を開くことはない。彼女はそんな父親を軽蔑していた。『余裕がない人』——自身を乳母やハンスに預けるほどに、彼は余裕がない人なのだろうと彼女は今でもずっと思っている。

「……」

トイレの鏡に映る自身の顔をリニアはじっと眺めていた。

窓の外では微かに水滴が落ちる音がする。雨が降って来たのだろう。

鏡に映る彼女の顔はどこか影が落ちている。普段の様子とはまるで正反対だ。鏡を見ると自身と正面から向き合わなければいけない。それは単に表面的な部分だけでなく、彼女にとっては自身の現在もそこに映し出されている様な気にさえなってくるのだ。

—自分は一体何をしているのか。何のため、誰のために生きているのか。

「えいつ」

漠然と浮かぶ不安を打ち消すように、リニアは両手で自身の頬を叩いた。

「笑顔!!笑っていないきゃ!!」

彼女はにこりといつも通りの笑顔を映す。いや、映したつもりだった。しかし次の瞬間、その顔は先ほどの無表情に戻っていた。

この笑顔は偽物なのではないか。他人の前でだけ見せるためのものではないのか。本来の私の表情はこんなものではないのではないだろうか。

再び彼女の心中に広がる不安。

「それでも―、」

周りも私と同じはずだ。他人の前では良い顔をする、笑顔でいる。それは悲しいことだが仕方がないことだ。当然の事のはずだ。

「しつかり。リニア・イベリン」

鏡の前の自身に向かって、彼女は再び呼びかける。リニア・イベリン―イベリン。決して捨てることのなかった名字。

彼女は気付いている。何故名字を捨てることができなかつたのか。

自身の子に関心を示さなかつた父親。きっとそれは彼女のトラウマとして今も心中に植えつけられているのだろう。彼女は自身を見てもらいたかつた。家を出て、魔法士になった。それでも父親は彼女を視界に入れることはない。彼女は今でも思っている。

―本当に最後まで余裕のない人。

「ふあああ」

思わず零れる欠伸。俺は睡魔に抗うように顔を上げる。図書室前の渡り廊下で俺はぼんやりと校舎裏を眺めていた。

「……結局、あの男は何者なんだ」

先ほどの研究室前での一件。彼は何故、金色の魔女という名を知っていたのか。疑問ばかり浮かぶが、どうやら俺の脳はだいぶ疲れているらしい。まるで脳が強制的に瞼を閉じさせようとしている気さえ――、

「みーつけた!!」

突然響いた声に、ぱつと俺は目を開いた。振り返ると、そこにいたのはリニアだった。

「お前……やっと起きたのか」

「ごめんごめん」

彼女は悪びれた様子を一切見せず、いつものように笑っている。普段なら小言のひとつも言ってやる所だが、実際のところわざわざ起きて、彼女が大学まで来た事に俺も驚いていた。

「何してるの？聡太」

「別に」

俺は大きく伸びをする。そして何となく落ちていた石ころを拾うと、壁に無かつて投げた。

「壁に八つ当たり？何かあったの？」

「何もない」

素っ気なく答えたはずなのに、彼女はニコニコと笑いながら俺の隣に腰を下ろした。そして当たり前のように腕に手を絡ませてくる。

「離れる」

「え!!この程度のスキンシップならいいじゃない!!」

「重い」

「……余裕のない人」

「はあ？」

ふと、彼女の口から洩れた言葉を。思わず聞き返すと、リニアははつと我に帰った様な顔で首を横に振った。

「何でもない、何でもない!!」

「……」

しばらく俺たちは会話をすることなく周囲を眺めていた。

長期休暇期間、滅多な事では学生も学校に来ることはない。彼らには皆、理由があつて今日ここにきているのだろう。

—目的。理由。

「あー……ただでさえ、頭ん中ぐるぐるしてるのに余計なことを」

傍にリニアが居ることも忘れ、ふと口をついて出てきた言葉に彼女はいち早く反応する。

「何？悩みがあるんだったら、このお姉さんに全部言っちゃいな!!」
自身たつぷりな顔で胸を張るリニア。彼女を見ていると、

「お前さ」

「ん？」

「どうして魔法士になったの？」

唐突な質問に彼女も、俺自身も当惑した。

「えつと……ど、どうしてなったんだらうね」

空笑いをして頬を搔くりニア。まずい質問だったのかもしれない。そう思った頃には、もう彼女の中では決心がついたのか、リニアはゆっくりと口を開いた。